

蛍の学習会開催報告

- 1 日 時 平成26年7月5日（土） 午後6時～
- 2 場 所 ほたるの里資料館



（旧牛房野小学校）

- 3 講 師 星川茂平治（前 牛房野川のほたるを守る会会長）



学習会の風景

一般の参加者に混じって
会員が参加。この写真撮影の
後、日中の仕事を終えた複数
の会員がさらに駆けつけま
した。

- 4 講演の内容（要約）

(1) 蛍が危機に！

牛房野川の蛍が危険な状態になっている。今年は例年よりも蛍の数が少なく、雌雄の比率（通常は、雄が8に対して雌が2の割合）にも変化が生じている。蛍の生育環境が悪化したことにより、雌を多くなるよう

な自然の摂理が作用しているかもしれない。蛍の点灯の仕方、光る体節の位置、色などで雌雄の比率は判断するが、今年はその光り方がいつもとかなり違う。蛍の餌となるカワニナが少なくなっているため、カワニナを増やす必要がある。約 20 年前（平成 7 年に守る会）から牛房野地区で蛍の保護活動を実施してきたが、初めての危機を迎えている。カワニナが減った原因としては、雪解け水が多かったために河床が低下し、カワニナが流されたことが考えられる。ところで、カワニナの増殖には注意が必要である。インターネットで蛍の餌として「カワニナ」の名前で売られているが、しばしば「コモチカワツボ」である場合がある。それを知らないで川に放流すると、カワニナが絶滅するだけでなく、コモチカワツボを食べた蛍は成虫になることができないために蛍もいなくなってしまう。またそれ以外の生き物も蛍は食べるが、成虫にはなれない。

※ コモチカワツボ; オーストラリア原産の外来種で、日本に広く繁殖している。

(2) まだ幼虫なのに光りながら上陸

川で生活してきた蛍の幼虫は、いつもは5月の連休後あたりから5月20日ごろにかけて、雨の降る晩に一斉に上陸し、柔らかい土の中に「土繭（つちまゆ）」を作って蛹になる。蛍は穴掘りが下手で、土が柔らかくなる雨降りの時期を待っている。既に幼虫は光りながら上陸してくる。幼虫は10メートルぐらい登ることができるので、コンクリートブロックの護岸なども登り切る。上陸している時期は、幼虫を踏みつぶす危険性があるので、観察などは極めて慎重にしなければならない。上陸して蛹になった蛍は、40日ぐらいで成虫になる（羽化）と言われている。しかし、実際は日数ではなくて温度と日数の積算（積算温度）で羽化の時期

が決まると思われる。東北は上陸するのが西日本などよりも遅いので、30日ぐらい。

(3) むしろ水生の蛍は少ない

蛍は、世界に約2千種、日本に46種おり、そのうち15種が光る。幼虫の時期に水中生活をするのは、ゲンジボタル、ヘイケボタル及びクメジマボタルの3種だけで、他は陸生。一般的なイメージでは、蛍と言えば水生と誤ってしまいが、むしろ水生の蛍の方が少ない。中でも、ゲンジボタルは日本特産。

蛍に関する書籍は、西日本の蛍を例にして書かれていたため、東日本などの雪国の蛍には説明が合わないところがあった。例えば、蛹となっている期間、ゲンジボタルの光るリズムなどについての記述である。

(4) 孵化してしばらくの餌が大事

交尾を終えた雌は、その場所よりも上流へ向かって飛び立ち、そこで産卵する。産卵された卵は、30日で孵化する。ゲンジボタルは一匹が300～500個、ヘイケボタルは50個の卵を産む。8月上旬には孵化して、水面に落下する。しばらく水面に浮かんだ後で、水中に沈む。幼虫は絶食に強いが、卵から産まれた直後だけは餌が必要で、生まれた直後に餌にありつけるかどうかは生存率に大きく影響する。ゲンジボタルは一生の間にカワニナ20個分が必要と言われている。

(5) 牛房野以外の尾花沢市内各地にも蛍がいっぱい

いろんな地域で「ホタルを見たが少なかった」という話をよく聞くが、

実は見えているのは一部だけで、雌など草むらにいる蛍、交尾を終えて上流に飛んでしまっている蛍が多数いる。けっして目に見えるホタルばかりではなく、もっと多くの蛍が生息している。

蛍には暗い所が必要で、人家の光などで明るい所には棲みにくい。人家から離れたところに棲んでいるので、地域の人達は蛍の存在を気付かない場合が多い。これまで尾花沢市全域を調べて、ゲンジボタル、ヘイケボタル、ヒメボタルなどの種類と場所をまとめた。牛房野地域の外にも各地で見ることができる。

(6) 子供たちは天使の活躍

牛房野地区が蛍で有名になったら、大量に捕まえている人達が現われたこともある。何人かが乗ったマイクロバスが集落からさらに奥へ入り込み、網で捕獲していたということだった。子どもたちが気付いて大人に知らせて駆けつけたら急いで逃げて行った。山形市内の建設業者だったらしい。

また、普通の人達も蛍を捕まえようと網を持ってくる人たちが大部分だったこともあった。大人たちが蛍を捕まえていると、牛房野の子どもたちが「おじちゃん、ホタルを捕まえてどうするの」と聞いた。大人は「家へ持って行って離してやる。そうすれば増えると思う」とすると、子どもたちは「おじちゃん持って行っても死んでしまうよ。かわいそうだ」と言ったそうです。このような可愛い子どもたちの言葉で、大人たちは捕まえるのを止めた。

同じ目的でも、大人が「蛍を守っているんだ。捕まえて駄目だ」と言ったのでは、言い争いになったり、後味の悪いしこりを残してしまうこ

とになる。子どもたちが大活躍である。そして、子どもたちは蛍のことを勉強していろんな人たちに得意げに説明する。小さな博士である。

5 事務局担当者の感想

(1) 深い研究心

今では、牛房野川の蛍と言えば、大変に有名になっていますが、それまでになるには、私たちには見えない御努力があったようです。昔、蛍は極ありふれた存在でしたが、その実態には知られていませんでした。私たちが知っているのは、夜に光っていることだけで、どこで生まれて、どこでどのように育ったかは闇の中と言うべきものでした。しかし、蛍を復活させるには、どうしても蛍のことを知らなければなりません。そうは言っても適切な参考書がないので、牛房野の人達は実際に自分たちで研究されました。牛房野地区だけでなく尾花沢市内全体もくまなく調査されています。このように蛍がいっぱいになるまでに、大変な御努力があることを私たちは肝に銘じておかななくては思います。

(2) いつかは理解してくれる。

講演の中で心ない人たちが、保護している蛍を捕まえていたというお話を聞いた時には、「とんでもない人たちがいたものだ」と憤りを感じましたが、落ち着いて考えますと、「蛍」と聞けば「捕まえる」と連想するのも無理からぬことかもしれないと思えてきました。1960年ごろまでは、どこでも蛍が多く見られ、子どもたちは「観賞」よりも「捕まえる」ことに夢中になりました。捕まえて蚊帳の中に放すのが大抵の行動パターンでした。

それが、農薬、農地改良等により蛍がいなくなって、蛍を保護しなければならぬ時代になってしまいました。それでも捕まえた人たちは、昔の記憶で行動してしまいました。しかし、牛房野の人達のお気持ちが通じたのでしょうか。捕まえようとする人たちの話を聞かなくなりました。

(3) 諦めない地道な活動

保護活動を開始されたのは平成7年から言うことですから、実に20年目を迎えていることとなります。20年ともなると色々な変遷があったはずですが、それでも一途に続けられた背景には、郷土への深い愛着、お互いの固い信頼と絆があったことが想像されます。そして、素晴らしいリーダーたちがおられたようです。

(4) 地域ぐるみの活動と子供たちの活躍

子どもたちの活躍には、微笑ましく感じ、また感嘆しました。子ども達は、大人にはない素晴らしい力を持っているようです。これから当保全会の活動を考えていくうえで、この点についても大いに参考にしていきたいと思います。